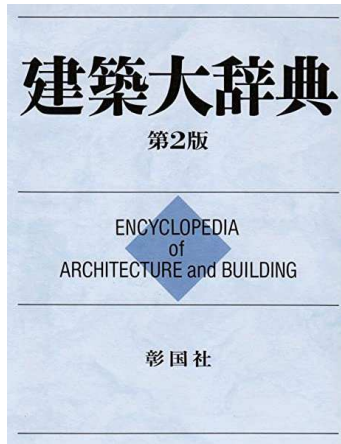


建築大辞典

彰国社



■辞典の話ではなくて、立花隆（たちばなたかし）さんのお話です。

ジャーナリストとして1974年「田中角栄研究-その金脈と人脈」などで政治金脈批判、知の巨人、「猫ビル」という猫の顔をもつ蔵書の事務所がある。立花ゼミとして、大学ゼミで「調べて、書く、発信する」具体的なアウトプットをとということで本づくりをされていました。具体的なものづくりをはじめたとたん、いろんな障害にあう。実践教育を基本に先生は本づくり手順や失敗の対応を教え、自己学習能力を身につけさせる。そしてできた3冊の本。

❖ 新世紀デジタル講義・・・新しい情報学のひとつのテキストブック

❖ 二十歳のころ・・・有名無名の68人の人生歴史インタビュー

❖ 環境ホルモン入門・・・内分泌かく乱物質をケミカルに全体的に解説



■一般教養のことですが、大学とはまず一般教養をさずけるところという考えは明らかに失われてしまったと言っています。アメリカなどでは大学の学部4年間一般教養しかやりません、専門はロースクール（法・医学校等）。アメリカでは人文科学、自然科学、社会科学の3分野を偏ることなく広く学習するという方式がとられていました。

■大学の歴史は、1877 東京大学、1886 帝国大学、1897 東京帝国大学・京都帝国大学（明治30）、1947 東京大学（旧性）、1949 東京大学（新制）。つまり1877～1897まで20年間、大学は東大だけ。国家が設立した官吏養成のための官学という特質があります。そして1991 制度改革、教養学部解体、教養学部がのこるのは東大だけとなりました。明治から実学中心、明治以前は、寺子屋・藩校で四書五経など通じて道理教育が教育の中心となっていました。

時代はちがえど、いまはなき中国の科挙は、ほとんど思想と文化的教養の試験でした。立花隆さんの提案は・・・。

❖ 戦前：旧制高校3年（教養3）・大学専門学部3年だった。

❖ 現在：小学校6・中学3・高校3・大学4（教養2・専門2）・・・当時の教養3年を無理に2年でやっている

❖ 提案：小学校6・中高一貫5・大学5（教養3・専門2）・・・中高一貫にして6年を5年でやり教養を3年に戻す

■大学のことは、知的亡国論で文科省の教育支配の弊害を言っています。社会や理科が選択制で受験し、物理や日本史を学ばないで大学へ。理科（物理、化学、生物、地学）社会（地理・世界史・日本史）全体を学ぶ機会がない。アメリカの大学では卒業できるのは2割程度ですが、日本では8割が私学となり少子化で学生集めに試験をやさしく。知りたいがためにやっている基礎科学系統の学問になると、記者会見しても、何の役に立つんですか、と質問が。基礎科学上の発見がとりあえず実用的には何の役にも立たないことくらい、西欧ではそういう質問がまっとうなジャーナリストからは飛び出さないが、日本の場合はかならずあるみたいです。



■全体像（実践知・体験知を除く）、ダランベール百科全書（岩波文庫）・用語の基礎知識（自由国民社）・イミダス（集英社）・知恵蔵（朝日新聞社）、日経新聞1ページ～最後の文化欄まで理解できる、これが現代人が持つべき知識基本ラインとのこと。日経は経済だけじゃなく政治～学芸文化欄、科学欄も情報関係記事も水準が高いそうです。

■千字文（せんじもん）は、4字句の韻文でつづられた1000個の、それぞれ異なる文字の集まり。6世紀頃、久しく中国の児童の文字を学ぶ初歩の教科書として用いられてきました。た漢字文化圏の諸国、朝鮮や日本で広く用いられただけでなく、近世にはヨーロッパの国々で翻訳されました。250句の中に中国文化の基礎概念が網羅されていて、岩波文庫（小川環樹注釈）のものは、東洋思想、東洋文化の世界が自然に身についていくと言われます。長年の知的伝授の蓄積の上にこういうものが作られました。基礎概念が200～300わかればその世界の全体の見取り図が頭に入ってくる・・・ということで建築大辞典。（案内：黒野）

